安房大神宮の森コモンプロジェクトへの想い

高田 宏臣（安房大神宮の森コモンプロジェクト代表・館山市森づくり大使）

土地はいっときの預かりもの

安房大神宮の森はその名のとおり、もともとは安房国一の宮である安房神社の御神域です。地域の暮らしを支える大切な森として、安房神社に仕えてきた御師たちが代々暮らし、守ってきた山域です。近年は人の手が入らず、台風で荒れたままの状態でしたが、数千年にわたる暮らしの営みは、山中のヤブに埋もれた古道や段々畑、集落の痕跡に見ることができます。

自然豊かな館山市の大神宮の森を開発から守るために、私は仲間と共に融資を受け、2023年末に 55 ヘクタールの広大な土地を購入しました。しかし「所有する」考えはありません。「いっとき預かり、育み、そして未来に手渡す」という思いで、「安房大神宮の森コモンプロジェクト」を立ち上げました。

コモンとは共有財産を意味します。「土地は預かりもの」という感覚は、日本人だけでなく、敬虔な世界中の先住民たちが当たり前に持ち合わせてきた思いだと思います。それぞれの風土と文化を育み、美しく豊かで柔軟な国土の根幹となってきたとのではないでしょうか。

海へとつながる環境の再生を

自然の自律的な働きと調和するインフラを構築するうえで、土中環境を傷めずに安定させてきた、伝統的な民間土木の知恵を継承する視点と工法が大事です。石や木の根の活かし、ワラや落ち葉などの自然にある有機物を使って施工し、土中の水脈を守り、すべての生命にやさしい工法として、「有機土木」を提唱してきました。

この技術を多くの人に広めながら、安房大神宮の森に残る、かつての道や水場、段々畑を再生し、豊かだったこの地の営みを取り戻したいと願い、仲間に呼びかけました。これは私一代で終わることではなく、生きている間にどこまでできるか分かりませんが、数十年かかってでも、風土の再生の希望の道筋をつけることくらいはできるかもしれません。

大神宮の森が育む水は、無数の谷津田の源泉となって、麓の集落の暮らしを支えてきました。山が蓄えた水は、周辺の海域にも豊富な海底湧水をもたらし、豊かな漁場を支えてきたのです。

ところが、日本有数の漁場であった安房地域のリアス式海岸も、近年は「磯枯れ」と呼ばれ、海の砂漠化が進行しています。マグロはえ縄漁発祥の漁村として、江戸・明治期を通じて栄えていた布良（めら）漁港も、今や魚影が消え、漁業者が激減しています。

〝森は海の恋人〟といいます。環境を傷めない有機土木の技に、海とつながるこの山域を豊かに再生することで、美しい海を取り戻すことが出来るのではないかと思います。

いのちの源の恩恵を忘れた現代人

山河はその地域の暮らしの根本であり、いのちの源です。自然の恵みと直結した自給的な暮らしから遠く離れた現代、多くの人びとが忘れてしまったかもしれません。土地の活用や地形の改変は、今や奥山にも及ぶようになりました。

風土環境の意味を読みとらぬまま、故郷の山を削るなど無造作に地形を改変してしまえば、長い間、地域の暮らしを守り、支え続けてきた風土の加護も恩恵も失われてしまいます。

とくに、ここ 10 年ほどで急速に進んだ太陽光や風力発電設備による開発の動きは止まりません。いのちの源泉が次々と破壊されていく現状を目の当たりにし、激しく心を痛めてきました。

荒廃した奥山で住処を奪われた野生動物は、いよいよ絶滅の危機に瀕しています。相次ぐ熊の駆除に関する報道は、社会をさらに暗くし、ますます自然と人間との分断を深めているのではないでしょうか。

環境の荒廃は、そのまま人間の心も体も蝕んでいるようです。子どもの自死願望でさえ急激に増え、統計をみても最多を更新し続けています。人が生きものとして道を失ってしまったことによる、悲痛な叫びに感じられます。

私たち人間が壊してしまった大地は、人間の手で豊かな風土や営みを取り戻し、次世代にお返ししなくてはなりません。本来の森は、あまねく生きもののいのちを育み、その恩恵により、人もまた心身ともに健康を取り戻すことでしょう。

黄色部分が「安房大神宮の森」

明治初期の迅速図。
赤線でなぞった道を復活予定

房総半島南端の館山市と南房総市（白浜町）の市境に広がる山域は、何十年も人が入っていない。海沿いの国道 410 号の建設以前から、神戸-根本-布良-神余を往来する山道が縦横無尽にあった。

山奥には水源があり、かつての集落や棚田の痕跡がある。長い間放置され、令和元年台風で倒れたままの木々を伐り開き、崩落した路肩を補強する。けもの道を塞がないように気をつけながら、古道や湧水を整備再生していく。豊かな森がよみがえる。

いきもののサンクチュアリ

携帯電波も届かない山中で、荒れた森を整備しながら、五感が研ぎ澄まされていく。山と里の行き来から得られる気づき。自然の中で身体の感覚を開く体験は、大きな悦びと学びを得られる。満天の星空の下、峰々に囲まれた山中での野営。ミミズクの声や動物たちの足音に耳を澄ませ、静かで賑やかな一夜はなんと贅沢。

災害と土中環境

私は東日本大震災を機に、これまで積み重ねてきた造園・土木実務を見直し、傷んだ自然環境の再生と、土地を傷めない環境造作、土木工法の実証と指導、普及に取り組んできました。

また、毎年とめどなく広域化する風水害の被災地や土砂災害地に足を運び、周辺環境から災害発生要因を調べてまいりました。

令和元年房総半島台風で安房地域は壊滅的な被害を受けました。なかでも館山市の沖ノ島は、歩いて渡れる無人島として環境学習で人気のスポットでしたが、次世代へ受け継がれるべき森の未来が危ぶまれる状況でした。ここで長年活動を続けていた NPO 法人たてやま・海辺の鑑定団の要請を受けて、翌年より環境再生の指導をおこなってまいりました。それが縁で、館山市森づくり大使を任命いただきました。

令和６年元旦、私は家族とともに石川県和倉温泉に滞在しており、能登半島地震に遭遇しました。避難所で一夜を過ごし、日々の穏やかだった暮らしや、能登の美しい風景・環境が一変してしまった被災の様子を目の当たりにし、その後も何度となく調査・支援活動に能登へ訪れました。

東北や能登らしい地域らしい復興を考え、政策から環境・風土をどう守るか、という提言を発信してきました。それらの報告は、YouTube「地球守ラジオ」でご視聴いただくことができます。

https://www.youtube.com/@chikyumori_official4061

縄文小屋にみる古代の智恵

石川県能登町の真脇遺跡（国指定史跡）には、縄文時代の道具によって復元された縄文小屋があります。幅５ｍ奥行６ｍ高さ 3.5ｍの小屋を 13 本の柱で支えています。

なんとこの縄文小屋は、震度６の能登半島地震で倒壊しなかったのです。「ほぞつき角材」で木材を接合し、カラムシの繊維やフジの皮からつくった縄で固定しただけですが、古代の知恵・技術は地震に強い免振構造だったことが証明されました。しかも板葺の屋根に積んであった石も落ちなかったことに、私は感銘を受けました。

これを作ったのは元宮大工の棟梁で、縄文大工の JOMON さんこと雨宮国広さんです。ぜひ安房大神宮の森にも縄文小屋を作りたいと相談したところ、快諾いただきました。早速、2024 年春に５日間のワークショップを企画し、延べ 200 名の参加者とともに、１棟の縄文小屋を完成しました。ここを活動拠点にしながら、長い年月をかけて縄文集落をつくっていきたいと思っています。

▲ 丸太の下部を焼いて炭化した柱を埋めると土中の水流が滞らない

▲ 楕円形のほぞ穴で骨組を作り、茅を差し込んで葺く

山の英気を体感する場として

長い間、私は山登りを続けてきました。神気あふれる深い山と一体になり、ひたすら歩くことで、いのちの世界の呼び声に応えるように、感謝と喜びに包まれます。それを知る者にとって、常に山は立ち返るべき心の拠り所となることでしょう。

古来、どれほど多くの人たちの魂が、豊かな山の息吹に救われてきたことでしょう。この森の再生は、まずは古道をたどり、かつての道の再生普請から始めます。多くの人たちと、そのプロセスから体感を共有したいと思います。

そして、その道を歩くことで人が健康な心身を取り戻し、生き方への目覚めと気づきの場になるのでは、との希望にあふれています。

風土の豊かさを取り戻す、その過程で、人として、生き物としての大切な有り様に気づき、それが現代の閉塞感を乗り越え、未来につながる希望と明るさを取り戻す一隅の光となることを望んでいます。

安房大神宮の森がコモン（共有財産）として、どのような形で利用され、100 年先の未来に手渡すのがよいか、皆さんの知恵を借りながら一緒に考え、実現していきたいと思います。

『ぼくは縄文大工』
雨宮国広 著

安房大神宮の森 大地の憲章（草案）　2024.3.29.版

1. 憲章の目的

本憲章は、大神宮の森を育み、その恵み豊かな山河を生きとし生ける
すべてのものの共有の宝として、未来永遠に繋いでゆくための指針である。
活動に関わるすべての人は本憲章を尊重して行動するものとする。

2. 土地の所有について

美しい大地、清らかな山河、これは今も昔も、そして未来においても、
生きものすべてのもの。先人が育み、暮らし、受け継いできた大地を、
健やかなまま未来に繋いでいくことが、今を生きる私たちの在り方と考える。
大神宮の森において、誰も例外なく利己的な土地所有の権利を求めず、
大地を大切に扱い、見守り、育み、そして次世代に手渡すものとする。

3. 大神宮の森　整備の心得

- 山の神気を損なうことなく、畏敬を持って向かい合う
- 豊かな風土を伝え続けてきた先人の営みを想い、尊重し、感謝し、そこから学ぶ
- 先人の技、その奥にある人のあり方と大地へ向き合う姿勢の感得に努め、体現する
- 50年後、100年後の風土や営みに希望と夢を忘れず、楽しく臨む
- すべての生きものへの温かい眼差しを持って、何をも敵対しない。排除を考えない
- 整備は有機土木の視点と考え方に基づいて行い、工法に精通した者が先達となる
- 参加者はその姿勢を体得することから始め、自分の判断だけで整備を行わない

4. 運営について

土地の転売は行わず、営利を目的としないものの、
この山河を守る仕組みと活動継続のための収益化を目指す。
その運営は、賛同者、出資者、参加者、地域の方々含めて、
憲章の精神共有の上で話し合い、行政や自治会、地域住民、市民団体の方々と連携し、
協力関係構築に努め、活動を通して地域社会に貢献するあり方を絶えず模索する。

5. 国土、地球環境、人類のために

山が本来の神気を取り戻して美しく、そしてすべての生きものたちに包まれて、
その温かな気配や巡る自然の営みを外にも内にも感じ、共に生きるということ、
そこに人の癒しがあり、心の静寂を取り戻す場となる。
この地球で人がこれからどのように生きるか。
自然を感じながら先人たちが喜びを持って見つけたものを、
私たちも大神宮の森で日々発見し、心に温かい灯火を灯そう。
そしてそれを多くの人に感じてもらいたいと願う。

＜メッセージ＞

NPO 法人安房文化遺産フォーラム
代表　愛沢 伸雄

今、安房神社周辺の広大な森を守るためのプロジェクトが進んでいます。環境土木の専門家である高田宏臣さんと、精神科医師の渡辺克雄さんが共同代表となって株式会社森と海を設立し、融資を受けて取り組みを始めました。文化財保存運動を30年続けてきた私も、「コモン（共有財産）」という考え方に共感し、闘病中ながら歴史検証などで協力することとなりました。

安房は「安らかな家」を意味し、その歴史をひもとくと、再生の力をもつ「よみがえりの地」だといえます。安房大神宮の森に集う人びとはそうした力を得て、現代の困難な課題に立ち向かい、子どもたちに夢と希望を与えるための「新しい風」を吹かせることでしょう。

この壮大なプロジェクトは、館山市・安房地域にとって、ありがたいばかりでなく、混迷した現代社会の羅針盤として、全国的なモデルになると確信しています。

2024 年 4 月 27 日に共催した「第1回安房大神宮の森　風土・歴史フォーラム」は、YouTube で公開されています。ぜひこちらもご視聴ください。

高田 宏臣

「安房大神宮の森コモンプロジェクト」代表。館山市森づくり大使。一般社団法人有機土木研究会代表理事、NPO 法人地球守代表理事、生きものとしての土木研究会代表、（株）高田造園設計事務所代表取締役。
著書『土中環境』『よくわかる土中環境』等。